Hubert Glaser

まえがき

1777 年 12 月 30 日選帝侯マックス・ヨーゼフ III 世がミュンヘンのレジデンツで死んだ。彼はバイエルンの皇帝ルートヴィヒの最後の男系後継者であった。死の 3 週間前、彼はまだゲオルク騎士団の総長として宮廷礼拝堂に出ていた。彼が頭痛と寒気を訴えたとき、医師達はカタルと診断した。数日後医師達は病は天然痘であることをしぶしぶ白状しなければならなかった。さらに数日後に容態快復の見込みが無くなった。皆が大騒ぎする中、選帝侯はまったく冷静で、死の準備をし、臨終の秘蹟を受け、夫人に別れを告げ、聖母マリア像をヘルツォークシュピタール教会から自分の寝床に持って来させ、死戦期に陥り、死去した。
選帝侯が病気だということはもう秘密にしておけず、それを聞いて人々の間に大騒ぎが起こった。特にミュンヘンでは祈願所や祈祷所に人々が殺到し、聖ベンノの聖遺物の後について市内を行進し、ヘルツォークシュピタール教会の聖母マリア像についてレジデンツまで往復した。ついに鐘の音が主君の死を知らせたとき、「大勢の人がおいおい泣いた － それは苦痛よりも畏怖からだった」。
マックス・ヨーゼフ III 世が遺した国はまだ旧い秩序で固く結合されているように見えた。つまり領土拡大、政治の体制、社会の構造、帝国と教会へ包含されていることに関して百年来基本的にほとんど何も変わっていなかった。すべての変化はゆっくりと起こり、嵐のような戦争の間でも旧構造は壊れなかった。何度でも国はゆっくりした発展の道に戻り、状態を安定させ、君主の野心と彼の敵の復讐が与えた傷を癒やした。
選帝侯たちは大マキシミリアンが 17 世紀初めに作った彼らの地位を、1704 年と 1742 年の戦争による惨事と多額の借金にもかかわらず、堅持していた。等族の委員会は以前と同様に税を認可し、徴集し、管理しており、権利を何も失わなかった。領主と等族の二主政治は半世紀も前からバイエルンの内部関係を形成していて、今なお継続していた。住民の人口はほとんど増えず、主に農業で暮らしていた。これは百年前も百年あとも変わらない。啓蒙主義者が闘争文書で信じさせようとしたほどには住民は搾取されず、貧乏でもなく、不幸でもなかった。貴族はその影響力を保持し、領主の回避路を形成し、土地への権利を堅持した。国の財政破綻から何度も発生した、ホーフマルク制を打破し、貴族から下位裁判所を奪い取ろうとする試みを貴族は大した苦労もなく阻止できた。教会による魂の支配もまた壊れなかった。選帝侯領バイエルンは信心深い選帝侯のもとで信心深い国であった。信者の行進や巡礼、聖物や聖遺物の崇拝、修道会や信心会、住民の祭りとしての教会祭など、これらはすべて以前と同様に存在した。18 世紀の閉鎖的な世界観は次第に開かれて行ったが、それも人々の信心の堅さには影響を及ぼさなかった。バイエルンの司教たちは帝国領主と高位聖職者との二重の地位を保持した。相も変わらず司教たちは選帝侯領バイエルンの政治に口を挟み、選帝侯の教会政策が彼らの指図と相反するときは抗議した。教会の経済的な地位について触れられることはまず無かった。修道院と教会は国家の富の半分以上を所有し、権利関係は 1583 年から変わっていない宗教寛容令で確保されていた。選帝侯が教会の機能を国家目的に使いたいならば、教皇庁にお伺いを立てなければならなかった。
また欧州の権力争いにおけるバイエルンの重みは増えも減りもしなかった。決定はウイーン、パリ、ロンドンそして最後にはポツダムで下された。選帝侯政府は自身が引き起こしたのではない危機の中を進まなければならなかった。以前の選帝侯たちが抱いていた理想郷的な希望は破綻した。先代の旧バイエルンの選帝侯が示したような現実に対して研ぎ澄まされた感覚が国をさらなる災難から救い、慎重に改革を行うのに役立った。一方、7 年戦争の間に強大国は 3 大陸で互いに損害を与えあった。
しかしバイエルンが従来と変わらない状況にあるように見えても、宮廷生活、人民の生活、社会秩序および政治的行動を観察すれば、前代未聞の深さの地溝のような、大きな危機の兆しが窺えた。領主と顧問官たちはさし当たり王朝の問題だけを見ていた。マックス・ヨーゼフ III 世にはもう子供ができそうになかった。選帝侯領をどのようにヴィッテルスバッハ家に残せるのか？　子供のいないプファルツの選帝侯が死んだらバイエルンの選帝侯が、また子供のいないバイエルンの選帝侯が死んだらプファルツの選帝侯が、どのようにすれば家系の全財産を争いなしに所有できるのか、また領土にどん欲な皇帝ヨーゼフ II 世を暴力的な介入

から遠ざけられるか？　どのようにすれば欧州の勢力均衡に護られて遺産継承が妨げられずに完了できるか？　ミュンヘンとマンハイムの宮廷では非常に慌ただしい作業が始まった。それは旧い家系間契約を更新し、新しい家系連合に次の父系親族も含め、お互いの財産に手を出せる特許状を作成した。1777 年 12 月すべての準備が整った。枢密顧問官がミュンヘンのレジデンツの主君が死去した部屋から現れて、死亡日を証書に記入し、新しい選帝候を布告した。プファルツのカール･テオドアは翌日に大晦日のミサの最中にこの知らせを受け取った。彼は馬車を用意させ、1 月 2 日にはもうミュンヘンにいた。
しかし愛されていたミュンヘン生まれの主君の死と、信頼されず、人気の無い後継者の到着とが人民をいきり立たせたにしても、家系の交替は、単に外的な徴候であり、家系の予期せぬ出来事が主役を演じた事態であった。新しい時代の予兆は既にあらゆる生活範囲で見られた。その潮流はまず考え方で始まり、ついで社会の状況と公的な秩序を変えた。政府が慎重に進め、また人々がほとんど気づかなかったものの、その潮流はバイエルンにも広がった。
バイエルンの修道院の学者は、イタリアとフランスで生まれた、理性に基づいた神と現世に関する議論を引き継いだ。大学は、宗教上の争いにおいて立場を明確にして、また主君の宗教政策に対して弁明書を提出する、という旧来の課題から身を遠ざけていた。理性的な、数学的な明快さで真実を求める際には、もう著者がカトリックかプロテスタントかの区別はなかった。新しいやり方は信仰の教義と理性的な認識を互いに融和させ、伝統的な偏見から脱して共通のキリスト教思想へと進む道を開いた。その際に信仰の解体は考えていなかった。むしろ理性的な理由から保護する方に動いた。つまり教会を外国の急進的な敵対者から護り、教義をもっと強固にする必要があった。
新しい流れは極めて速く政治に反映された。選帝候カール・アルブレヒトは早くも啓蒙主義の教授を彼の長男の教師にした。この息子 マックス・ヨーゼフ III 世はその治世が 10 年を過ぎてから科学アカデミーを創設し、それによって国に新しい哲学と新しい自然科学を栄えさせることができる中心を創った。
あらゆる改革運動がそうであるように、啓蒙主義も助成する側が有用と危険との間に引いた境界で停止することはなかった。君主自身が新しい合理的、功利的、国家利益優先的考え方により帝国教会の権限を制限し、国中の修道院の収入を削減したいと思った。彼は国家教会の構想を進めるため断固とした先鋒を宗教顧問官の長官に任命し、その構想に従って委員会を改組し、その際に宗教家委員の多数を辞めさせ、外部者の数を増やし、宗教界と世俗界との区別を無効とした。彼は高位聖職者選挙、修道院および宗教財団の資産取得さらには修道院集会への入場すらも国の監視下に置いた。修道士たちに君主への苦情申し立ての道を開き、修道院会に国の境界の内側で新たに組織化することを強制し、収穫高に課税し、領民が高位聖職者の職、司教座教会主席司祭の職、主席司祭の職、主任司祭の職に就けるようにし、国の検閲を聖職者の異議を無視して行った。彼は司祭に対して厳しい態度を取り、国の司教領を作るぞと脅し、バイエルンの教会設立の歴史から君主に恒久的な監督権があるとした。
このような措置は一見すると 16 世紀と 17 世紀の君主の教会政策の継続のように見える。しかしその目的はまったく違っていた。カトリック改革の時代において国のカトリック主義、一般の信仰の地位が重要になる一方で、信仰生活はもはやその時代の教会から供給される精神に適合させるのではなく、国家の中で位置づけされ、国家の目的に従わなければならなかった。かつては永遠の救済の獲得が領主の政治の最終目標であったが、今は国家自身が最終的な意義となった。宗教は、国家、国家の存続、国家の破壊力、人心を国家につなぎ止めることに役立たなければならなかった。不安定になり、自ら崩壊しつつある教会はこのような決然とした介入に直面していた。帝国司教は教皇庁の強力な地位を背景にしてカトリック宮廷に抵抗した。修道院では修道士生活の意義に対する疑問が大きくなった。イエズス会では国がまず管理を強め、それから教皇庁の廃止勅令を通告し、教団の資産を国の管理下に置き、神父は追放されるか、有用と思われたときはそこで任用すると通告されたとき、護ってくれる者はいなかった。
しかしそうこうするうちに啓蒙主義の頑なな信奉者は、現在の状態を改善する能力の問題に関してもっと急進的な信念を持つようになっていた。彼らは結社の中で守られていた理性的な信仰心の理念を置き去りにし、人々を自立させ、継承されてきた教義と組織および伝統的な権威の束縛から解放することを目指した。宗教的君主も世俗的君主も、法的規則に統制される団体の個人も、つまり国家も教会も、理性に導かれた高潔な人格が切り離されるときには永続できない。この考え方は時代の潮流であり、新しい世界秩序を準備するという目標を

設定した秘密結社が選帝侯領バイエルンに創立され、インゴルシュタットの国立大学の啓蒙思想的環境を故里とし、そこからプロイセン、オーストリア、ハンガリー、ポーランド、イタリア、スペイン、スカンディナヴィアへと拡がっていったという、個人史的偶然に留まることはなかった。
このようにマックス・ヨーゼフ III 世が死去したあとのバイエルンは不安定な状態にあった。うわべは旧い秩序が無傷で保たれていた。新しい選帝侯カール・テオドアは官僚と等族を信頼していた。教会との闘いにおいて国家の権威は損なわれなかった。逆に教皇庁は君主との結び付きを復活させ、帝国教会の解放要求を拒絶し、さらにそのため旧くからの自由権を犠牲にした。しかし貴族と市民のエリート、選帝侯の顧問官や修道院の高位聖職者、国立大学の教授や学生たちは新しい時代がやって来る過渡期に生きていることを知ることとなった。問題はただ起ころうとしている大変革が急激なものかゆっくりであるか、穏やかなものか暴力的なものかということであった。

インテリ層の啓蒙主義的な将来への期待、体制権力の動揺と妥協の準備は国家と社会の転覆を引き起こすものではなかった。あとから回顧する者にははっきりした展開のように見えても、当時の者には未確定の、未知の未来に見えたであろう。
実際、マックス III 世ヨーゼフの死の 21 年後に後継者の選帝侯カール・テオドアがカード遊びの最中に脳卒中に見舞われたとき、神聖ローマ帝国の崩壊しつつある組織からまだすべての生活が消えたのではなく、旧バイエルンはいまなお存続し、その等族の構成もその教会との繋がりも決定的に変わった訳ではなかった。選帝侯は首相の腕の中で意識を失い、ベッドに寝かされ、放血法を施されたが効果は無かった。短時間だけ意識が戻った。死闘期は 4 日間続いた。宮廷の動きは慌ただしかった。署名が沢山入ったウイーンからの新しい交換提案と 15,000 名のバイエルン部隊を国内に駐留しているオーストリア同盟軍に引き渡すこととが議論された。2 月 16 日選帝侯は 2 度目の発作に襲われた。廷臣たちはレジデンツに急いだ。若い選帝侯夫人は死の床から遠ざけられた。中庭には鞍を附けた急使の馬が用意された。観音開きの扉が開き、たちまち訃報が拡がった。嘆き悲しむ声は無く、反対にレジデンツからずっと遠くまで後継者、新しい選帝侯マックス IV 世ヨーゼフに対する万歳の声が響き渡り、テアティナー教会の弔鐘の音と混ざり合った。酒場は満員となり、人々は互いに祝杯を挙げた。非嫡出の跡継ぎとプファルツのお気に入りたちを除いて、多くの人気のあった改革、ドーナウ湿地の開拓、イギリス庭園の施設、美術館の開設、首都の城壁撤去、選帝侯とその腹心の臣下のベンジャミン・トンプソンの博愛的な基本姿勢にも関わらず、終わってしまった治世に泣く者はいなかった。バイエルンの状態を安定させ、マックス III 世ヨーゼフが取った、選帝侯国を新しい時代に一歩ずつ適応させる道を最後まで行くには、熟慮した直線的な政策が必要であったろう。しかしカール・テオドアは、彼の個人的、王朝的および領土政策的な動機、国益および欧州における権力関係に共通項を見出すことに、また眼前にある複雑な状況を自力で処理することに、殊の外苦労した。彼自身もまたプファルツからミュンヘンに連れて来られた新しい人々も、地元住民の信頼が得られなかった。やがて彼らは鋭い目をした、広く結束して活動する、愛国主義者と改革者とが混じった反対運動派に直面することになった。彼の野心的な家系政策的プロジェクトを国際的な紛糾の中に送り出し、軍隊改革は停滞し、地域を前専制主義的国家理想像に結び付けようとし、選帝侯的な計画を抹消するために近い親戚と結託する中で、カール・テオドアは、純粋に王朝志向の、国益を無視した、等族と大衆の意見に逆らう政策をもはや押し通すことはできない、という経験をしなければならなかった。
マックス III 世ヨーゼフのもとではっきりして来た危機は今や表に現れていた。たしかに最初は急進的な反対者に売国奴と教会敵対者の烙印を押し、口を塞ぐことに成功した。しかし数年後にはフランス革命の密使が新たな反君主の急進主義を国にもたらし、広い地盤を使って煽動した。領地交換の憶測が一度収まったあと再び燻ぶった。ヴィッテルスバッハ家の散らばった領地を少なくとも行政的に統一したいという試みが最初の段階で行き詰まった。カール・テオドア統治の晩年、第二次同盟戦争中のもはや維持できない中立政策、ツヴァイブリュッケンの親戚との再婚によって遺産継承を遠ざけることができるという70歳代の男の大胆な希望、次の父系の親族マックス・ヨーゼフの高まる人気、絶望的な財政状態、広範囲の

世俗化によりお金をふたたび国庫にもたらそうという計画 ーこれらはすべて現存の体制が彼の課題にもはや堪えられず、旧い国家の秩序と社会を救えないことを強烈に示していた。
新しい選帝候マックス IV 世ヨーゼフは統治を行うことが決まっていたのではなかった。ツヴァイブリュッケンの公爵の弟としてフランスの国王ルイ XVI 世の軍隊で経歴を積む筈であった。しかしヴィッテルスバッハ家の歴史で例のない相続の経緯によって、まずツヴァイブリュッケンが、ついでプファルツ - バイエルンが彼の手に入った。どのように自分の権力を使用したらよいか、彼は慎重に考えた。彼はまた信頼している人からミュンヘン宮廷の政治とバイエルンの状況について講義を受けた。賢明にもカール・テオドアの路線と距離を置くことによって、彼は公爵夫人クレメンスの周りに集まっている愛国者グループ、オーストリアとの同盟への反対者、この時を待っていた改革者を獲得した。王朝の伝統と父親の訓戒という重荷がないので、彼は必要と思ったことが出来た。彼の教育はルソーの弟子たちにより計画が作られた。彼らはまったく哲学的でない頭の持ち主であるマックスを啓蒙主義的な基本思想に精通させた。王位継承者の地位を押しつけられて、マックスは新しい時代の政治家達を集めた。この男たちは、若い頃には急進的な考えを信奉し、そのあと頑なな原理主義を柔軟な実用主義と交換した人たちであった。フランス軍隊がライン川を越え、欧州の平衡と君主たちの反革命的連合が大国の利己主義のために崩れて行く間に、新しいバイエルンの像が彼らによって造られた。プロイセン王が亡命者を庇護しているアンスバッハで、彼らは未来の領主に彼らの考えを具申した。この新しいバイエルンは旧バイエルンよりも大きくならねばならぬことで一致していたが、それはハプスブルク家に逆らってオーストリアの方に拡張するのではなく、西方、フランケンとシュヴァーベンにある多くの小さな領地を吸収するというものであった。また国内では何世紀も伝承されてきたものを護ろうとは思わなかった。新しい政府は旧顧問官に取って代わり、専門的な担当で分けられ、新しい官僚制度は好意の贈り物に依存するのではなくしっかりと給与が支払われるものでなければならなかった。等族的特権ではなく、平等に課税されねばならず、多くの内国関税ではなく一つの統一的な経済圏でなければならなかった。地主は計量によらない成果を要求してはならず、下級裁判権は等族から、自治権は市から剥奪され、刑法では基本的人権主義が、宗派間では基本的寛容法が支配しなければならなかった。誰もが国家公務員に会うことができ、学校制度は改良が必要で、出版は国の監視から自由でなければならなかった。これらはマックス IV 世ヨーゼフがカール・テオドアの死後 4 日目にミュンヘンに入ったとき持って来た考えであり、24 時間後にはもう政府の改組に際に最も重要な路線を敷いた。彼はモンジュラ男爵を外務大臣に任命した。

マックス・ヨーゼフが 26 年の統治、20 年の国王在位ののち 1825 年に死去したとき、アンスバッハでの未来像は前代未聞の方法で実現した。旧欧州の崩壊、オーストリア軍、ロシアおよびプロイセン軍に対する革命軍の勝利、皇帝ナポレオンの欧州における主導的な地位、神聖ローマ帝国の崩壊、ライン連邦、最後にイギリスと東方の権力との大連合およびナポレオン支配の没落と、全欧州を巻き込んで 20 年も続いた擾乱は 1796 年のアンスバッハでは想像もできなかった。マックス・ヨーゼフもモンジュラもどのような状況のもとで旧バイエルンから現代的に管理された共同体を作れる状態になれるのか知ることが出来なかった。しかし事態の進展に見るように、バイエルンの政治はこの事態を利用してまずオーストリアおよびロシアと同盟を結び、それからフランスの庇護のもとに入り、最後にもう一度保守的な東方の権力に支えられて、その改革過程を完了した。
これによりバイエルンは王国にまで一体として大きくなり、国王マックス I 世ヨーゼフに代表され、カール・テオドアが残した国とはまったく違う国となった。国はフランケンとシュヴァーベンの方に、またプファルツで大きく張り出し、さまざまな領地を集積した。その平等化、行政、参加による集積は、君主とその大臣にとって最初の課題であった。新しい国家は教会から帝国法と忠誠の措置法による特別な地位と財産を剥奪した。それは頑ななカトリックの国が宗教的に混合され、宗派の同権に基づき、宗教寛容の原理が義務づけられたものであった。貴族は自身を国の徴税権の下に置き、世襲裁判権を国からの委託とすることを受け入れることによってのみその特権の一部を救うことができた。それでも貴族は自分たちの統治権の剥奪を徹底的に妨害した。改革者は市や市場の自治は無意味だと考えていた。ま

た市議会が残っているところはどの職務行為も国の監督のもとに行われた。近代的な平等化の風潮が権利の平等、つまり税と一般兵役義務の平等、の原理に貢献した。
最初からモンジュラには近代的な国家はこれまでの国家と異なった管理がされなければならないことは明らかであった。彼は今日まで残っているような 3 段階の行政体制を作った。政府を専門の省に分け、少なくとも上級官僚は司法と行政とを分離し、新たに地方裁判所網を組織し、課税の基礎として土地台帳の整備を促進し、官吏服務規程で公務員職の原則を定めたが、それは試験と成果に基づく採用と昇進、固定給、遺族年金などであった。
1808 年の憲法および組織の布告では改革措置が一つの閉じた体系にまとめられ、1818 年の憲法、それはモンジュラ解任のあとであったが、では税の承認の権限と請願および苦情の権限を持つ二つの議会の機関と、地域の自治が更新、補完された。
このように、旧い秩序の断片がまだ残ってはいるものの、20 年を経て、改革者の意志に従い、また国王がこれを承認したのち、新しいバイエルン国家が始まった。それは何世紀もの歴史の瓦礫から解放され、合理的な観点から整理され、なによりも君主個人と家族から自立するものであった。バイエルンの公爵領がすでに 16 世紀には統治する家系の家長の手に与えられる世襲財産となっていたが、それは家長が自由の処分することは出来るものではなく、完全に非個人的な国家という解釈が定着していた。つまり統治者が共同体を具現しているのではなく、共同体自身が絶対的で自立している完全な単位であって、国王はその一番上の機関であった。これは概念の再定義を超えるものであった。それどころかそれによって国家と社会の発展に対する新しい枠組みが設定された。その枠組みの中では、国家は自身の必要に応じて形を変えることができ、社会の躍動性を従来よりも自由に展開できた。この枠組みの中にまず新バイエルンの領土部分、フランケンとシュヴァーベンの帝国都市、領主司教領、辺境伯領の組み込みが可能になった。ここで王国の称号と王冠が意義あるものとなった。フランケン人とシュヴァーベン人をバイエルンの公爵領の臣民として強要することはまったく考えられないことであった。しかし彼らを新しい立憲君主国の市民として組み入れることに成功した。その際に君主にまったく新しい大きな課題が課せられ、最初の王たちは大いなる感情移入の能力でもってそれに対処した。それはばらばらの領土部分および競合する社会的な力を統合したあとの姿である。世俗化と陪臣化および併合のあと新しい国家は地方および地域の伝承に強引に干渉し、またかつての伝統を切断したので、支配者たちは慎重に、歴史の古い繋がり、人々のヴェアタッハ（Wertach）やイラー（Iller）、ペグニッツやマインへの歴史的な自負心を止揚し、一つにまとまった新しい国家意識を醸成することを始めた。国王達は彼らの国を（そのようにして）新しい文化的特徴でもって変革するために、彼らに残っている可能性を活用する中で、新しい大バイエルンの内なるアイデンティティがだんだんと生まれるように気を配ったが、このアイデンティティは（なおも）強力で 20 世紀の恐慌のころまで継続した。この国王は前代未聞の変革を遂行せねばならず、社会の多くの強力なグループを傷つけ、彼の官吏は教会を接収し、彼の臣民に 2 度も政治的な方針変更、国家的理由でもってのみ動機づけられた同盟変更を強い、多額の行政改革費用と次々と発生する戦費とを彼らに課した。さらに新しい領地には国王軍がまず征服者の占領軍としてやって来たにも関わらず、その国王が国民の好感を失わず、やがて新しく加わった市民からも国民の父のように尊敬されたことはまったくもって驚嘆すべきことである。君主たちは、とりわけ立憲君主制においては、その政治的功績をよく組織された代表制、優れた専門知識、明敏さと決断力によって得ただけでなく、もったいぶらない生活態度、気立ての良さ、話し好き、心配と喜びを他の市民と同じように口にする家族意識によっても獲得した。マックス・ヨーゼフの人柄について簡潔な要約を息子のルートヴィヒ I 世が父の死後に述べている。マックス・ヨーゼフは彼の洗礼名の日である 1925 年 10 月 12 日にニンフェンブルクでお祝いをし、家族や客と食事をした。ダッハウの孤児達がセレナーデを演奏した。夜ロシアの公使ウォロンゼフ伯爵が祝宴を催した。国王は 11 時までいて、オンブル（カードゲーム）で遊び、王妃、その妹、退位したスエーデン女王、彼の娘達と姪達と別れて住まい戻り、寝床に就いた。翌朝 6 時に召し使いが彼がいつもそうしているように頭を右手に支えている格好で死んでいるのを見つけた。王位継承者は骨壺に入れた父の心臓をアルトエッティングのグナーデンカペレにあるご先祖の中心に置くこと許可した。「これが最も良い心臓であることをその上に記さねばならぬ」。

展示会「ヴィッテルスバッハ家とバイエルン」の第三部はマックス・ヨーゼフ時代に絞った。その時代は決定的な変革の時代であり、将来に大きな意味を持っていた。それはランツフートのトラウスニッツ城で展示された 13 世紀、およびミュンヘンのレジデンツで展示された宗教戦争の時代と同様である。確かに 1800 年から 1825 年の 4 半世紀は常に歴史家の注目を浴びていたが、国王ルートヴィヒ I 世の治世ほどには一般の関心を呼ばなかった。バイエルンの最初の国王がまた独特の、フランスに刺激された、しかしお手本から個性的に変化した表現のスタイルを見出していたことは、後継者の芸術的およびパトロンとしての活動によって完全に隠れてしまった。壮大な個性に対する偏愛、フランス的な趣味に対する嫌悪がその際に働いていたのかもしれない。
ナポレオン時代の出来事がどのくらい深く生活環境に及んでいるかは絵よりも言葉でよりはっきりとさせることができる。このことから、この巻で出版される論文集は民俗博物館で催される「王冠と憲法」の展示と並んで、特別の価値がある。
まずミュンヘン、マンハイムおよびツヴァイブリュッケンにおいてどのように領主達が目前の遺産継承の準備をし、彼らの要求を旧い契約に根拠づけ、1 世紀にわたる家系間の不和から再び一つにまとまり、財産を欲深い隣国から護ったか、その家系政策の視点が明確にされる。
それから大変革の時代が目前に押し寄せる。時代は結果からだけではなく、その前提と経過から考察される。このようにしてかつての帝国から自由であった領土フランケンとシュヴァーベンの住民たちが遭遇したその政治的また歴史的に自明だったことに対する動揺だけでなく、その信心深い態度が傷つけられた旧バイエルン人が出来事の成り行きを見たときの深い動揺が明らかとなる。もちろん旧秩序、それは振り返るときいつも晴れやかな姿を提供するのだが、は政治的、経済的、社会的活力をもはや維持できなかったので、旧秩序が留まることなく没落に近づいて行ったことを洞察することも不可避である。
18 世紀から 19 世紀への移行期の観察に対して精神史的な手がかりが特別の意義を持つ。まず革命的な潮流が理論で認識できるだけでなく、精神生活、学者の省察、文学的な論議の中に再興の兆しも見える。教会、大学、全体の教育制度が国家や社会に劣らず一般的な変革に遭遇した。時代の中心人物、つまり皇帝ナポレオン I 世、はバイエルンにとってもすべての政治的および軍事的行動の一番重要な要であった。ホーエンリンデンとハーナウとの間のバイエルンは敵軍が通過する地域であった。バイエルン軍はオーストリア・ロシア側で革命軍と戦い、ナポレオン軍と共に東の皇帝軍と、ついでプロイセンと戦い、もう一度オーストリアと戦い、大陸軍と共にロシアと戦い、最後に大連合軍と共にフランス皇帝軍と戦った。これによって人々は生き延びることができ、またバイエルンは政治的な統一体としてオーストリアとフランスから同じように脅かされ、その存続は政治的に計算された司令のもとに、軍事的な出動によってのみ可能であったので、国民に犠牲を強いたものの君主の行ったことは正しかった。
経済的状態は混乱の期間には安定しなかった。つまり領土の新しい秩序はまず成果よりも問題をもたらした。また戦争は国民の資産に負担を掛け、生産性を圧迫した。平和になった最初の年は不作で、飢饉が襲った。国民経済学的な論文に元気づけられて、国王と政府はなによりも農業の振興に力を入れた。
弁髪様式とクレンツェ時代の間におけるバイエルンの芸術史をまとまった像を提示することはこの論文集の目的ではない。とはいえ、基本線は示され、また重要な視点 - 肖像画および戦争画、空間芸術 - に重点が置かれている。風景画はようやく最近展覧会と出版の対象になってきた。君主たちの収集活動は - カール・アウグストからマックス・ヨーゼフを経て若いルートヴィヒ I 世まで - 当時の欧州における嗜好の変遷を反映している。
最後に - ランツフートのカタログが公爵オットーI世の王朝開設に関する物語で始まったのに対して - 1918 年 11 月バイエルン君主制の終わりに関する考察で締めくくっている。
編集者として各著者の寄稿が政治的および軍事的な出来事、社会的な状況および芸術的な成果の多面的なスケッチを描いてくれたことに感謝したい。また設定された期限を受け入れてくれたことにも感謝する。また事務局の職員、ハンス・オットマイヤー博士、マルクス・ユンケルマン博士、アルブレヒト・グリブル博士の編集作業に対し、また出版者のアルベルト・ヒルマー氏、ならびにその原稿審査部、とりわけマルグレット・ティプトン女史とハインツ・F・ブレシング氏に感謝する。

フーベルト・グラザー

（図版 2 枚）

辻　伸浩試訳　Ver.1 2016.11.11